

存在し続けるもの

東埼玉病院
院長
川井 充

また今年も塩田賞受賞論文選考の季節が巡ってきた。塩田賞は第1回の授賞が1968年のことであるから、今年の授賞は第48回になる。第50回も遠い先のことではない。そういえば国立医療学会機関誌である本誌の創刊は1946年であるから、来年は70年目をむかえる。記念特集を予定するのであろうか。それなら、今から準備しなければならない。

こんなことを考えるようになったのは、昨年自分の病院が開院70周年をむかえ、職員たちとともに祝いの場をもってからである。記念式典で「国立病院機構東埼玉病院 70年の歴史」を題する講演を行った。10年ごとに作られた記念誌や院内報を読み直し、残されていた写真をひとつひとつ確認しながら、そのときそのときの院長がどのように考えながら病院を運営してきたかを感じとり、それを職員に伝えようと努力した。歴史の中には何度か存在の危機を乗り越えた時期があったはずである。節目のときにそれをあらためて確かめてみることは大切な経験であった。

世界で長寿企業が一番多いのは日本で、100年以上の歴史を持つ会社は2万、なんと1000年以上が8

社あるという。日本に長寿企業が多い理由はさまざまに議論されているが、社会的使命を重視した経営方針が背景にあるといわれている。病院にせよ、学会にせよその設立にはその精神があり、70年も存在し続けたからにはその時代その時代に立派な存在理由があったはずである。

1946年10月1日に刊行された「医療」創刊号終戦後まもない物資の乏しい時代であったため、確かに現在のきれいな紙、印刷、製本と比べるべくもないが、巻頭言である医療局長官塩田広重先生の発刊の辞には創刊の精神が高らかに謳われている。科学的発見を通じて世界の人びとの健康に資することで最高文化の民として尊敬されることを願う内容が記されており、これが「医療」の原点であると再認識した。

「医療」の歴史は会員の少なさ、投稿の少なさに苦しめられた歴史と聞くがこれを乗り越えて今日があることは間違いない。一貫した理念をもちながら時代にあわせてどのように変貌してきたかをおさらいしてみてもどうかと思うこの頃である。